

鳥取県教育センター創立50周年記念及び
いじめ・不登校総合対策センター設置10周年記念

「未来を拓く教育フォーラム」

(令和6年2月9日開催)

鳥取県教育センター創立50周年記念及びいじめ・不登校総合対策センター設置10周年記念
「未来を拓く教育フォーラム」の開催概要について

令和6年3月16日
鳥取県教育センター
いじめ・不登校総合対策センター

鳥取県教育センター創立50周年及びいじめ・不登校総合対策センター設置10周年を記念してフォーラムを開催しましたので、下記のとおり報告します。

記

1 目的

県教育センター創立50周年及びいじめ・不登校総合対策センター設置10周年を記念して、次世代の学校教育を担う力を備えた教職員の育成、急速な情報化を背景とした子どもたちの個別最適な学びと協働的な学びの実現、誰一人取り残されない学びの保障に向けた取組の推進について基調講演や分科会を通して学ぶ。

2 日時 令和6年2月9日（金）午後1時から

3 場所 鳥取県教育センター（現地及びオンライン配信によるハイブリット開催）

4 主催 鳥取県教育センター及びいじめ・不登校総合対策センター

5 対象 県内教職員、市町村教育委員会関係者、県教育委員会関係者 等

6 主な内容

(1) 基調講演

「新たな教師の学びの姿の実現をめざして」

国立大学法人兵庫教育大学 学長 加治佐 哲也 氏



ア 参加者 約130人（うちオンライン参加20名）

イ 概要

- ・校長は、教職員育成を本務として、その意欲やコミュニケーション能力を高めるべく、ファシリテーション力や様々な場面における対応力・危機管理能力を身に付けていくことが求められる。
- ・子どもの学びと教師の学びは相似形であり、研修観の転換を図ることで、教師の主体性・自律性に基づく、個別最適な学びと協働的な学びを実現していく必要がある。また、ICT教育や教育データを絶えず取り入れた学びも必要。
- ・校内における研修ファシリテーターの育成も重要であり、同僚性・協働性、心理的安全性に基づいて、互いに学び合う学校文化の醸成が必要。
- ・新たな研修制度の導入に当たり、教師の意欲や主体的・自律的な学びの姿勢を活かすことを基本

にして、研修受講履歴記録システムを活用しながら、一人ひとりの教師と校長が対話して研修を奨励し、成長を促すとともに、研修の成果を公務分掌や人事に生かすことにより学校改善を図っていくことが必要。

ウ 主な感想

- 学び続ける教職員や教職員集団を作っていくには、管理職（校長）の役割が重要であること、また、児童生徒と同様、教職員も主体的な学び手となるようにすること、探究的な研修にしていくことの重要性を認識することができた。
- 講演では、学習観の転換期にあたり、校長に求められる資質や力量について、あらためて考えることができた。自ら学び続ける教師を育成するために、校内の雰囲気づくりを大切にするとともに、一人ひとりの職員と対話をしながら、適切な研修の奨励を進めていきたいと思う。
- これからの教師の在り方について、様々な視点を与えていただいた。「学びとる」ことについて、最近、特に子どもたちの側面から考えることが多かったが、教師自身の学びとる姿勢も同じように考えていく必要があることがよく分かった。
- 教師の役割が変化すると同時に、教師の学びの姿も変化することを強く意識し、これからの研修企画に取り組みたいと思った。

(2) 分科会

第1分科会：「とっとりメンター方式を活用した人材育成の推進」

【パネルディスカッション】横浜市教育委員会事務局教職員育成課

主席指導主事 柳澤 尚利 氏

鳥取県初任者研修サポート教員

教育企画研修課指導主事



ア 参加者 約30人（うち、オンライン7名）

イ 概要

- 2名の初任者研修サポート教員からは、メンターチーム研修において「初任者の困りやニーズに応じた研修テーマ設定」や「温かな雰囲気づくり」を行うことが、若手教員の指導力の向上や安心感に繋がっていくことが語られた。
- 柳澤氏からは、横浜市が長年取り組んでおられるメンターチームを活用した人材育成の施策から、若手教員をチームで支えることの大切さや複数の先輩教員が複数の若手教員を支援することで相互の人材育成を図るシステムづくりの必要性について御示唆いただいた。人材育成のポイントは、人材育成を組織文化にしていくこと、支援を点から面にしていくということであった。
- メンター方式がうまく機能するかどうかは校長が鍵を握っていることを再確認することにより、校長から全職員へ理解を促すことの重要性が再認識されるとともに、課題として挙げられた。今後もメンター方式の目的及びそのよさや効果等が分かる好事例の発信等により、校内で人材育成が効果的に進められ学校文化として定着するよう伴走者として支援したい。

ウ 主な感想

- 横浜市の取組をはじめ、鳥取県内の学校の具体的なメンター研修の実践が聞け、たいへん参考になった。主体的でやってよかったと感じられる研修にするためのポイントが満載だ

った。誰にとっても有用感のある研修にしておられるのがすばらしいと感じた。今後、若手の割合が大きくなることを踏まえると、メンター方式の人材育成は有効であり、どの学校においても重要度が高いと思った。

- ・横浜市の実践は、本県より少し前を進んでいるため、課題となっている内容に興味がある。本県は手厚く県教委の指導のもとメンター方式がスタートしたが、現場の管理職を含め、その意義や目的、めざす方向性など、しっかりと職員全員で理解する必要があると思う。管理職のマネジメントは今後ますます大きく、重要になってくると感じた。
- ・先進の取組をされてきた横浜市が、新たなステージに入っていると感じた。学び続ける教職員、協働的な学びのイメージを実現するには、校長をはじめ全職員で新たな学校像のイメージを共有することが大切と思う。

第2分科会：「ICTを活用した教科等横断的な学習の推進」

【実践発表】

発表①「R3～R5 学びの創造先進校 鳥取市立江山学園の取組」

鳥取市立江山学園 教諭 谷口 朋宏 氏

発表②「地域の未来を賭けた 鳥工版STEAM教育の実践」

鳥取工業高等学校 主幹教諭 尾崎 昭彦 氏

【指導助言】 札幌国際大学 全学共通教育部 情報教育部 教授 岩崎 有朋 氏



ア 参加者 約30名（うち、オンライン12名）

イ 概要

- ・本県においてICTを活用し、「探究的な学び」や「STEAM教育」を軸に教科等横断的な学習を推進している2校が、これまでの実践について発表を行った。
- ・鳥取市立江山学園は、特設教科「江山かがやき科」を軸に、教育課程を見直し、子どもたちと地域の関りを重視した実践を行っている。子どもたちが自分の言葉で意見や考えを堂々と伝えていくために、自らの学習を振り返りながらブラッシュアップしていく学習活動を特設教科だけではなく各教科でも取り組んでいる。
- ・鳥取工業高等学校は、時代の大きな変革期を迎えた現代において、地域の発展のために活躍できる産業人材を育てるため、STEAM教育に取り組んでいる。特定の教科ではなく、ある物事やテーマについて、複数の学問領域を統合しながら探究を進めることを学校全体で意識し、各教科等で実践に取り組んでいる。
- ・札幌国際大学の岩崎教授から、各学校が実践を進めるために、まずは自らの立ち位置、どの段階にあるのか検証すること、そして「不易流行」というキーワードを示していただき、長い間積み重ねてきた学校教育の蓄積とこの先の時代に合った新しい学校教育の創造を、今まさに考えて実現していく必要があるとの助言をいただいた。

ウ 主な感想

- ・教育DXを推進していくにあたり、PBLやSTEAMについて具体的な実践例を示すことが有用だと感じる。様々な機会に紹介したいと思う。
- ・先進的な2校の取り組みを開けて、具体的なイメージがわかりました。PBLは自分の教科ではやってみたのですがまだまだでした。STEAMは言葉ではわかっているし、重要だろうとはわかっていたのですが、具体的な進め方のイメージが全然湧いていませんでした。2校の取り組みを聞き、学校全体で取り組むイメージが湧き、推進イメージが持てました。

- ・2校の取組を、自校でどのように組み込めるのかを考えながら聞かせていただきました。来年度の研究や教育課程、活動予定を検討できる今だからこそ、貴重な実践を聞かせてもらえたことに本当に感謝いたします。また、岩崎先生からはPBLやSTEAM教育の重要性や運用方法等、貴重なご助言をいただきました。失敗ややり直しも含めた実践を通して、児童とともに学びが積み上げられるよう、自校の取組を推進していきたいと思いをします。
- ・岩崎教授の、「古いこと（過去）を見てものを言わない。今から、先を見て、新しい学校教育の創造をしていくことが大切」という言葉が特に心に残りました。鳥取の子どもたちのために、今、私たちが必要だと思うことやしたいと思うことに尽力できる環境づくり、組織づくりが求められていると思います。

第3分科会：「すべての子どもたちに“つながり”と“学び”を」

～自宅学習支援事業の取組から不登校支援のこれからを見つめる～

【実践発表】いじめ・不登校総合対策センター 自宅学習支援員 他

【演習】eラーニング教材の体験



ア 参加者 約20人（うち、オンライン3名）

イ 概要

- ・教育機会確保法の理念を踏まえ、COCOLOプラン（誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策）にある「不登校の子どもたち全ての学びの場の確保」「子どもたちの心の小さなSOSの早期発見」「情報発信の強化」の取組を学校と教育委員会が総がかりで推進していくことが強く求められている。
- ・当センターとして、自宅で主に過ごす子どもたちに十分な教育が行き届いていないこと、現状の教育支援センターやフリースクールでは不登校の子どもたちの居場所づくりに十分対応できないこと、不登校（または傾向）の子どもを持つ保護者に相談窓口や支援に関する適切な情報が届けられていないことが大きな課題となっている。
- ・令和元年からスタートした自宅学習支援事業は、5年目を迎え、毎年約40名の不登校の子どもたちに安心して学べる機会を提供し、子どもたち一人一人の学びの履歴や学習の困難さを踏まえた関わりで、学習の習慣化、家庭内での生活改善、外出や再登校へとつなげる実績を上げてきた。その実践報告を通して、すべての子どもたちにつながりと学びを提供するための方策について検討した。

ウ 主な感想

- ・鳥取県は温かい県だと感じます。保護者や子ども達にもっと周知されるといいです。そのためにもまずは私自身が学びを深めたいと思います。
- ・取組の好事例を紹介してほしい。校内サポート教室を含め学校への支援をお願いしたい。また、いじめ、不登校について子どもや学校のアセスメントの協力をお願いしたい。
- ・様々なつながりの中で、生徒、保護者、学校等への支援を続けていただきありがとうございます。

(3) ポスター発表

「特別支援学校高等部（知的障がい）におけるICTの効果的な活用を通じた協働的な学びを実現する授業スタンダードの開発」に係るポスター発表を行いました。

（発表者：鳥取県教育センター長期研修生）



(4) 展示企画

・教育センター50年の歩みについて写真等の展示で紹介しました。



・昭和～平成～令和にかけて、過去から現在までの教科用図書の歴史の展示を行いました。



7 その他

・フォーラム終了後に、本県初の県立夜間中学として令和6年4月に開校する「まなびの森学園」の現地視察を行いました。（約20名参加）

「令和の日本型学校教育」の実現に向けて 全ての子どもたちの可能性を引き出す “個別最適な学び” “協働的な学び” への転換

鳥取県教育センター創立50周年記念/いじめ・不登校総合対策センター設置10周年記念



基調講演

「新たな教師の学びの姿の
実現をめざして」

かじさ てつや

加治佐 哲也 氏

《プロフィール》

兵庫教育大学学長。独立行政法人国立高等専門学校機構監事、第11期中央教育審議会委員、「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会委員等を歴任。主な著書に「学校管理職養成スーパープログラム」等。



新たな教師の学びの姿
子どもたちの多様化・社会の変化に伴い子どもたちの学び（授業感・学習感）教師の学び（研修感）を転換し、「**新たな教師の学びの姿**」（個別最適・協働的な学びを通じた「主体的・対話的で深い学び」）の実現が、これからの教育に求められます。

未来を拓く教育フォーラム

令和6年 2月9日 金

13:00~15:40（受付開始12:30）

場所 鳥取県教育センター

対象 県内教職員、市町村教育委員会関係者、県教育委員会関係者等

申込 右のQRコードを読み込んで申込又はTEL及びFAX
◆申込期限：2月1日(木)



◆タイムスケジュール◆

- 13:00~ 開会
- 13:20~ 基調講演
- 14:40~ 分科会（3分科会）
- ①とっとりメンター方式を活用した人材育成の推進
- ②ICTを活用した教科等横断的な学習の推進
- ③すべての子どもたちに“つながり”と“学び”を
～自宅学習支援事業の取組から不登校支援の
これからを見つめる～
- <展示> センター50年の歩み（写真）
教科書の歴史（昭和～令和）
- <視察> まなびの森学園

【問い合わせ】

鳥取県教育センター

鳥取市湖山町北5丁目201 TEL:0857-28-2321 FAX:0857-28-8513
<http://www.pref.tottori.lg.jp/kyoikucenter/>

鳥取県教育センター

検索